

「媒辞が自己意識であり、それが両極へと分解する」とはどういうことか？  
——ヘーゲル『精神現象学』自己意識章「承認の純粹概念」の再検討——

Über die Bedeutung der Aussage: „Die Mitte ist das Selbstbewusstsein, welches sich in die  
Extreme zersetzt“. Eine Untersuchung des reinen Begriffs der Anerkennung  
in der *Phänomenologie des Geistes*

竹島 あゆみ  
TAKESHIMA, Ayumi

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第47号 2019年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.47 2019

## 「媒辞が自己意識であり、それが両極へと分解する」とはどういうことか？

### —ヘーゲル『精神現象学』自己意識章「承認の純粹概念」の再検討—

竹島 あゆみ\*

#### はじめに

本稿の目的は『精神現象学』自己意識章の「承認の純粹概念」を論じた部分の終盤に現れる、「媒辞Mitteが自己意識であり、それが両極へと分解する」 (§ 184/110) という一節を解釈することである。この〈分解テーゼ〉を解釈することは同時に、ヘーゲルの自己意識・承認・精神の概念を再検討することを意味する。この解釈と再検討に鍵を与えるのは、『精神現象学』におけるfür es (それにとって) / für uns (我々にとって) という二重の視点あるいは二重の語り方についての考察である。

以下では、まず、ヘーゲルが『精神現象学』の自己意識章において、自己意識は精神の概念であると述べ、その内実は他者における自己統一であるとしていることを確認する(1.)。次いで自己意識章の「承認の純粹概念」における承認のプロセスの叙述を詳細に見ることによって、自己意識の構造が運動において捉えられたものが「承認」であることを示す(2.)。そして、この「承認の純粹概念」の行論が、自-他に分離した自己意識から始まり、相互承認による統一へとという流れを示しているのであるから、自己意識の統一から始まって両極へと分解する〈分解テーゼ〉との間には不整合があるように見えることを指摘する(3.)。しかし最後に、『精神現象学』全体の語りの視点を考えに入ればこの見かけ上の不整合は解消されることを示すとともに、〈分解テーゼ〉における媒辞の意味を、『精神現象学』精神章以降及び『大論理学』「概念論」の「推論」に登場する媒辞と比較することで確定し、それが自己意識・承認・精神の概念の解釈にどのように影響するのかを明らかにする(おわりに)。

#### 1. 自己意識・精神・承認

『精神現象学』自己意識章のいわゆる承認論の直前で、ヘーゲルは承認の問題に立ち入る前に、自己意識についての詳細な分析を行っている。ここで注目すべきなのは、自己意識が他者との関係においてはじめて自己意識となると言われている点である。他者における自己自身との統一が自己意識存在の根幹にある<sup>1</sup>。

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

<sup>1</sup> 体系期にもこの点は変わらない。

例えばエンツィクロペディの精神哲学中の記述を見よ (§ 414Zu.)。

「自我は…この他者において自分自身のもとにある Das Ich ... ist in diesem seinem Anderen bei sich selber...」(TW10. 201)。

ひとつの自己意識がひとつの自己意識に対して存在する。このことによって初めて、自己意識が実際に存在する。というのもここにおいてはじめて自分の他的存在における自己自身との統一が自己意識に対して生ずるからである (§ 177/108)。

またここでは、そうであるがゆえに自己意識は「精神の概念」であると言われる<sup>2</sup>。

また、しかし自己意識が対象である場合には、この対象は対象であるとまったく同様に自我でもある。——これによって我々には既に精神の概念が現にある。…それは、我々である我、我である我々である (ibid.)。

「精神」とは端的には「絶対的実体」であり、やや詳しくいえば「それぞれ別々に存在する相異なる自己意識の対立の、完全な自由と自立性において、それらの統一である」(ibid.) ようなものである。ヘーゲルはこの内容を象徴的に、「我々である我、我である我々である」とまとめているのである。

この箇所はよく知られており、ヘーゲルがここで『精神現象学』において初めて精神の定義を行っているという点、そしてその根幹にあるのは相異なる自己意識の統一、あるいは他者における自己統一であるという点については、ほぼすべての解釈者が同意すると思われる。しかし例えばこの「相異なる自己意識の対立」のさす内容について、一致した見解があるわけではない<sup>3</sup>。我々は、この精神の定義を再解釈するための示唆を、「承認の純粹概念」、とりわけその中の〈分解テーゼ〉の考察によって得ることができるであろう。

さらに次の § 178 においてもヘーゲルは端的に、自己意識が精神の概念であるということを、自己意識の「二重性の中にある精神的統一」と表現している。

自己意識は他の自己意識に対して即自かつ対自的にあるとき、そしてそのことによって即かつ対自的にある。いいかえれば、それ〔自己意識〕はただ承認されたものとしてののみ存在する。自己意識のもつ二重性の中にあるその統一という概念、あるいは自己意識の中で実現されつつある無限性という概念は、多面的で多義的な交錯なのである。…これらの二重性の中にあるこの精神的な統一という概念を分析すれば、我々に承認の運動があらわれてくる (§ 178/109)。

<sup>2</sup> さらにさかのばれば、それは「真理の生まれ故郷」 (§ 167/103) とも言われていた。

<sup>3</sup> 例えばこの点について、マクダウェルは二人の個人の自己意識ではなく、一つの自己意識内の二側面であるという見解をとっている。McDowell, J., "The Apperceptive I and the Empirical Self: Towards a Heterodox Reading of "Lordship and Bondage" in Hegel's Phenomenology", *Hegel Bulletin*, Vol. 24, Issue 1-2 (number 47/48), 2003, 1-16.

このように「精神の概念」＝「自己意識」＝「二重性の中にある統一」として、静的にとらえられた自己意識の構造を、運動においてとらえると、「我々には」ある「承認の運動」が現れてくるという。ここでこの「承認の運動」とは、承認そのものの生成のプロセスを示しているのだろうか。それともそれは、解釈者である我々の認識のプロセスを示しているのだろうか。この問いにもここで直ちに答えることはできない。この問いは先に提示した本稿の主題的な問い、すなわち〈分解テーゼ〉をどう解釈するかと深く関係しており、それゆえそれに対する解答と合わせて、本稿の最後で答えられるだろう。

## 2. 承認の純粹概念

前節で見たように、ヘーゲルは、精神の概念であるような（静的な）自己意識を分析すると、承認の運動が現れるとするが、それはとりあえず「承認の純粹概念」として、§ 179から § 185にわたって論じられる。以下ではヘーゲルの行論に沿って、やや詳細にそのプロセスを見ていくことにしよう。

### 2.1 承認の前提——自己意識の二重性(1)

自己意識にとって他の自己意識と対峙していることが出発点である。

自己意識にとって他の自己意識があり、自己意識は自分の外に出ている。このことは二重の意味をもっている。第一に、自己意識は自分自身を失っている。というのは、自己意識は自分を他の存在者として見出すからである。第二に、自己意識はそれによって他者を廃棄している。というのは、自己意識はまた他者を存在者とは見ずに、他者のうちに自分自身を見るからである（§ 179/109）。

既に自己意識の成立要件として、他者との相対が不可欠であることを見た。重ねて承認論の出発点であるここでも同じように、やはり自己意識は初めから自分だけで存在しているのではなく、他者と相対したときのみ自己意識たりうることが示唆されている。〈私が私の外に出ている〉とはいったいどのような事態であろうか。このことは二重の意味を持つと思われる。それは〈私が私のうちにとどまらず、外に出てしまっている〉ということと、〈外にあるのは他者ではなく他ならぬ私である〉ということの二重性である。詳しく言えば(1)–①第一に〈他者によって〉はじめて自己が成り立つのだから、「自己意識は自分自身を失っている」。すなわち第一には、自己意識は自己内的に（自分だけで）自己確証することができないという、いわば自己意識の〈外部依存的〉、〈他者依存的〉な自己のあり方が言われているのである。(1)–②しかし第二に、その他者を自らにとって疎遠な、異他的な存在ではなく、反対に自己意識の成立の根拠とみなしているのだから、この自己意識にとって目の前の他者は既に他者ではなく、〈自己の外なる自己〉というべき存在である。

## 2.2 他的存在の廃棄の二重性(2)

自己意識は自分が自立的であるためには、このような自分の他的存在を廃棄しなければならない。

自己意識はこのような自分の他存在を廃棄しなくてはならない。この廃棄は〔上記の〕第一の二重の意味を廃棄することなので、それゆえそれ自身、第二の二重の意味も持っている。第一に自己意識は他の自立的存在者を廃棄し、そうすることにより自分が存在者であると確信するようになることに向わなくてはならない。第二に自己意識はそうすることにより自分自身を廃棄することに向かう。というのも、このような他者は自分自身だからである (§ 180/109)。

「他存在 Anderssein」とは文字通りには「他であること」であるが、実はこの語は、自分自身のありかたをも意味しているのであり、自己と身体的に区別される文字通りの他の個人だけを含意しているわけではない。この語は前節で述べたように〈他者に相対することで初めて成立する〉自己のあり方、いわば〈他者依存的な〉自己のあり方をも、同時に含意している。

このような前提の下で、本当に自分が自分であるという確信を得るためには、自己意識はこの前提そのものに抗わなければならない。すなわちこの他存在(他者及び他者依存的な自己のあり方)を廃棄しなければならないのだが、このこともまた(1)に対応した二重性を持つ。(2)-①第一に自己意識は「他の自立的存在者 das andere selbstständige Wesen」(=他者)を廃棄することによって「自分が存在者であると確信するようになること」にむかう。しかし(2)-②そのことによりかえって「自己意識は自分自身を廃棄することに向かう」ことになる。というのも(1)-②でみたように、「この他者は自分自身だからである」。

## 2.3 自己への還帰(自己の取り戻し)の二重性(3)

しかしこの廃棄は、自分自身のうちへの二重の意味での還帰でもある。

二重の意味での自分の他存在を廃棄することは、自分自身のうちへの二重の意味での還帰でもある。というのは、第一に、自己意識はこの廃棄によって自分自身を取り戻すからである。なぜなら、自分の他存在を廃棄することによって、自己意識は再び自分と等しくなるからである。しかし第二に、同じく自分に再び他の自己意識を与え戻す。というのは、自己意識は他者のうちで自分であり、このような他者のうちにある自分の存在を廃棄することによって、他者を再び自由にするからである (§ 181/109)。

自己も他者もこのようにして自立的な存在となる。(3)-①第一に自己意識は自分の他存在を廃

棄するのだから、自己自身を取り戻す。(3)－②しかし第二にそれはまた他者にとっての自己の存在を廃棄することで他者を自由にするということでもある。

#### 2.4 運動の二重性/相互性(4)

このような承認の運動のプロセスを全体としてみたとき、それは両方の自己意識の二重の運動である。

ひとつの他の自己意識への関係における自己意識のこの運動は、このようなしかたで一方の行為として表象されていた。しかしこの一方の行為自身が二重の意味をもっており、自分の行為であるのとまったく同様に他方の行為でもある。というのも、他の自己意識もまた全く同様に自立的であり自分のうちで完結しており、それ自身によって存在しないものは、そのうちに何一つないからである。…それ〔第一の自己意識〕が相手に行うことを相手が自身でも行わない場合には、それ〔第一の自己意識〕は相手に対して自分だけではなにも行うことができない。それゆえ、運動は端的に両方の自己意識の二重の運動である。各々は自分が行うのと同じことを他方も行うのを見る。各々は自分が他方に要求することを自分で行う。したがって、各々がその行うことを行うのは、ただ他方が同じことを行うかぎりにおいてのみである (§ 182/110)。

(1)～(3)で示した承認構造は一つの自己意識の側から見たものであり、そこでは自己意識の行為が他者へ向かうものであると同時に自己へも向かう行為であるという行為の対象の二重性が明らかになった。しかし(4)では、実はそれだけではなく、ここにはまた、一方の自己意識が行うことを同時に他の自己意識の側も行っているという、行為者そのものの二重性も含まれていることが明らかになった。

#### 2.5 運動の総括——承認の再帰的定義(5)

自己意識は、互いに承認しあっているものとして承認しあっている。

媒辞Mitteは自己意識であり、それが両極へと分解する。そして各極は自らの規定性を交換することであり、反対へと絶対的に移行することである。しかし各極は意識としては確かに自分の外に出ているが、同時に自分のうちに引き戻されて、対自的に〔自分に對して〕あり、そして自分の外にあるということが各極にとってある。各々〔A〕が直接に他の意識〔B〕であり、またそうでないということが各極にとってある。また同様に、この他者〔B〕が対自的であるのは、自分〔B〕が対自的に〔自分だけで〕存在するも

のとしての自分を廃棄することによって、そしてその他者〔A〕の対自存在〔自分だけでの存在〕において対自的〔自立的〕であることによってのみであるが、このことが各極にとってある。…両極は互いに承認しあっているものとして承認しあっている (§ 184/110)。

上記(1)~(4)にわたって述べられてきた、「ひとつの自己意識がひとつの自己意識に対して存在する」 (§ 177/108) ことから始まる承認のプロセスはここで円環を閉じることになる。「このことによって始めて、自己意識が実際に存在する」 (ibid.) ことになったはずであり、「ここにおいてはじめて自分の他的存在における自己自身との統一が自己意識に対して生ずる」 (ibid.) ことになったはずである。この承認のプロセスを、ヘーゲルは上記のように再帰的な定義として端的にまとめている。ここに完遂された承認とは、その内実としては承認の相互性の相互確認以外の何ものをも持たない。

さてまさにこの節に現れるのが、「媒辞は自己意識であり、それが両極へと分解する」という〈分解テーゼ〉である。ここでは「媒辞としての自己意識」がもともと統一したものとしてあり、それが両極へと分解することが示されているようである。このように承認のプロセスを〈統一→分離〉という流れとしてとらえることは、上記(1)~(5)に見たような、承認のプロセスを、自-他に分離した自己意識から始まり、相互承認による統一へとという流れ、すなわち〈分離→統一〉という流れとしてとらえることとは齟齬をきたすのではないだろうか。

### 3. 問題の焦点

さてここでようやく我々は本稿の中心的な疑問にたどり着いた。前節では、「承認の純粹概念」において「二重性の中にある統一」という自己意識の構造が動的なものとして分析されていることを考察した。そこでは相対する二つの自己意識から出発し、他者の否定から自己否定へ、そしてそれと表裏一体をなす自己への還帰へとという承認の運動のプロセスが、二つの自己意識の相互的な運動として遂行され、最終的に「両極は互いに承認しあっているものとして承認しあっている」と総括される。

このように「二重性の中にある統一」である自己意識を分析したものが「承認の純粹概念」であるという解釈を前提するとき、「媒辞Mitteが自己意識であり、それが両極へと分解する」 (§ 184/110) という〈分解テーゼ〉は何を意味するのか。 § 177で「ひとつの自己意識がひとつの自己意識に対して存在する」と言われているように、そもそも最初に二つの自己意識があり、それが対峙しているということが「承認の純粹概念」の前提であったはずなのではないか。しかし〈分解テーゼ〉では一見、二つの自己意識が対峙する以前に、一つの前-自己意識のようなものがあり、それが二つに分解したと言われているように読める。が、もしそうだとしたら、「承認の純粹概念」の

記述内部に大きな不整合があることになる。

そうではないとすれば、どのような読みの可能性があるだろうか。恐らくそのためには、「承認の純粹概念」が、誰にとって何を記述しているのか、というところからもう一度読み直さなければならないだろう。

この疑問点の解決の鍵となるのは、既に述べたように、für es（それにとって）/für uns（我々にとって）という、『精神現象学』特有の二重の視点あるいは二重の語り方である<sup>4</sup>。

結論から言うと、「承認の純粹概念」では、意識<sup>5</sup>にとって（für es）生成してくるプロセスの話をしているのではなく、我々にとって（für uns）の概念の叙述がなされていたのであった。「純粹」概念という言い方自体がそれを示唆している。

『精神現象学』の展開を先取りしている「我々」にとっては、「自己意識」が先に行って「我々としての我、我としての我々」たる「精神」となることは既に知られている。その見地から、（やがて一つになるものであり、そもそも一つのものであった）自己意識が、（さしあたって説明の便宜上）両極に分解する（と仮に言われている）のであろう。もう少し積極的に言えば、「媒辞は自己意識であり、それが両極へと分解する」とは、まさに「我々」が統一体である自己意識を、二つの自己意識へと分析して説明することを意味していたに他ならない。我々から見れば、自己意識＝精神はテロスとしては一つのものであり、純粹概念としてはそれで間違いないのである。なぜなら、純粹概念はそもそも無時間的なものであり、その展開は純粹に論理的なものであって、時間的な生成を含まないからである。承認の時間的な生成が論じられていくのは、承認の現実態を考察する § 186以降のいわゆる主－奴論からである。

## おわりに

前節で述べたように、「承認の純粹概念」が我々視点からの記述であることは、実は「承認の純粹概念」の冒頭に宣言されていた。そのことは、次の引用によく現れている（傍点による強調はヘーゲル、太字による強調は引用者。以下同様）。

我々には承認の運動が現れてくる (§ 178)。

そして「承認の純粹概念」の末尾に近い部分では、次のように「純粹概念」から「主・奴論」への移行が示されている。

<sup>4</sup> この問題について、最近の注釈書の中では例えば下記が先行研究の概要をまとめている。

J. Stewart, J., *The phenomenology of spirit reader : critical and interpretive essays*, State University of New York Press, 1998, 66ff.

<sup>5</sup> ここでは自己意識として登場しているが、広義には（そして「我々」との対比では）意識といえる。



ここでは「我々」が承認の純粹概念を分析するのではなく、「自己意識自身にとって」承認の過程が現象してくると言われているのである。それにともない、以前には「二重性の中にある統一」（§178/109）と表現されていたものがここでは「統一の中にある二重性」という表現になっている点にも、細かいことではあるが注意すべきである。

自己意識の統一の中にある二重性というこの承認の純粹概念が、いまや承認の過程が自己意識にとって現象してくるままに考察されねばならない（§185）。

そして同節では続けて下記のように言われているが、これは〈分解テーゼ〉とほぼ同じ内容であることが見てとれるであろう。

媒辞が両極へと歩み出てきて、両極は両極として相互に対立しており、一方はただ承認されたものであり、他方はただ承認するものである（ibid.）。

結局、「媒辞が自己意識であり、それが両極へと分解する」（§184/110）という〈分解テーゼ〉の謎めいた外観からもたらされた疑問は、ここでの視点が自己意識自身ではなく、我々の視点であったということを考えに入れることで氷解するのである。そのことは視点が我々の視点から自己意識自身の視点へと切り替わる §185 を見ることで、明確になった。そこでは、「いまや」承認の過程が「自己意識にとって」どのように現象してくるかが考察されなければならないとして、これ以降の記述が「意識にとって」の視点（für es）からなされることが明示されている。そのことは裏を返せば、ここまでの記述、すなわち「承認の純粹概念」（強調引用者）というものが、基本的に我々の視点（für uns）から語られていたということを明らかにしているのである。

その後の『精神現象学』の展開の中で、特に精神章以降においてはこの「我々にとって」と「意識にとって」の視点のズレは統一の方向に向かう。それもある意味では当然で、ヘーゲルによれば精神とはまさに「我々」（正確に言えば「我々である我、我である我々」）のことだからであり、意識の視点は我々の視点に吸収される。それに伴い、本稿のテーマである媒辞もその役割を弱めていく。自己意識相互の対立に代表されるような両極の対立が表層的なものであることが明らかになり、本来的な統一が実現していく以上、両極の媒介をなす媒辞もその役割を終えるからである。この後媒辞に関するまとまった記述は精神章Aの「人倫」、Bの「教養」及びCの「道徳性」に現れるが、いずれも媒辞は両極の見かけの対立を統一する見かけの媒介であるが、実は本質的には統一が先立っていたことが明らかになる、という文脈においてなのであり、基本的には本稿で明らかにしたパターンの反復である。

例えば「人倫」では男性の掟である「人間の掟」と女性の掟である「神々の掟」を媒介するもの

が、男性と女性との合一 (= 婚姻) の境地であるが、これが媒辞と呼ばれている。「男性と女性との合一が、全体という活動する媒辞とその境地をなす」 (§ 462/250)。

また「教養」では媒辞は文字通り「言葉」であり、それが国権と財富、高貴な精神と下賤な精神の二極に分裂する。次の引用部分からは、〈分離→統一〉の運動が同時に〈統一→分離〉の運動でもあることが明確に読みとれるだろう。

精神とはこのようにして媒辞であり、この媒辞はあの両極を前提し、両極がそこにあることによって生み出されている。しかし同時にこの媒辞は両極の間に溢れ出す精神的な全体であり、この全体が両極へと自らを分裂する (§ 508/277)。

この「言葉」としての媒辞はC「道德性」における良心論においても一度、相互に承認し合う、行為する良心と批評する良心という両極の間を媒介するものとして登場してくる。

しかし言葉とは、ただ自律的で承認されている自己意識の間の媒辞としてのみ登場してくる (§ 653/351)。

この「言葉」としての「媒辞」というアイディアは、後年の『大論理学』においては、第三巻「主観的論理学または概念論」の第一篇「主観性」第三章「推論 Der Schluß」で詳細に論じられることになる。そこでは明確に、推論の本質が、「両極の統一であり、両極を結合する媒辞あるいは両極を支えている根拠である」(TW6, 353)とされる。しかし当初の「悟性的推論」は両項の自立性を固定したものと捉えているため、その統一すなわち「媒辞」もさしあたっては固定したものとして現れる。

媒辞／中項 (*medius terminus*) という表現は空間的表象からとってこられたものであって、媒辞があるということそのものが、諸規定が互いに相手の外にあるという状態にとどまり続けることに寄与している (ibid.)。

しかし次の段階である「反省の推論」の中で、媒辞は「両極の…措定された、言い換えれば具体的な統一」となる。ここでは一方の極の規定は他方の極において措定されている<sup>6</sup>。しかしまだ媒辞は抽象的规定としての概念であり、それゆえ両極の統一は両極とは異なるものである点に、「反省の推論」の形式性がある。これが解消されるのが、推論の最後の段階である「必然性の推論」であ

<sup>6</sup> これは2. 5で引用した、「承認の純粹概念」における下記の記述に対応している。「各々が直接に他の意識であり、またそうでないということが各極にとってある」 (§ 184/110)。

る。ここでは、「媒介するものと媒介されるものとの区別が消失する」(TW6, 400)。

反省の推論では、媒辞は両極の規定を外面的に結合する統一としてある。必然性の推論では、媒辞は展開された、全体的であると同様に、単純な統一ともなる。このことを通して、媒辞が両極に対して区別されていることに存する推論の形式は止揚された (TW6, 400f. )。

このようにして『大論理学』では推論が止揚されることによって、第一篇「主観性」の段階が終わりを迎え、言い換えれば推論の運動の中で「各自が他者の媒介によってのみ存在するという媒介性」(TW6, 401) が止揚されて、第二篇「客観性」に移行する。推論構造としての主観性が客観性のうちに内在化されると同時に、媒辞も外在的な媒介というこれまでの役割を終えるのである。

以上のように、『精神現象学』精神章の検討及び『大論理学』概念論の検討を通じて、媒辞という用語がヘーゲル独特の推論概念と密接に関係しており、〈固定された両極の媒介をなす、それ自体固定された媒介〉を意味することが明らかになった。そしてここから振り返ってみると、実はこのことは、『精神現象学』においてすでに、〈分解テーゼ〉の少し後の箇所で、下記のような形で示唆されていたのである。

各極は他極にとって媒辞であり、これを介して各極は自分自身との媒介的關係に入り、また自分自身と**推理的に連結する** *zusammenschließt* (§ 184/110、強調は引用者)。

## 文献表

*Gesammelte Werke*. In Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft, hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg: Felix Meiner 1968ff. [=GW]  
GW9: *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. von W. Bonsiepen und R. Heede, Bd.9, 1980.

『精神現象学』からの引用についてはこのアカデミー版全集9巻から行い、(§ 177/108)のように、「パラグラフ番号/GW9の頁」の順で示した。なおパラグラフは序文からの通し番号になっている。

*Werke in zwanzig Bänden*. Theorie Werkausgabe. Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1969ff. [=TW]

TW6: *Wissenschaft der Logik II*, Bd. 6

TW8-10: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, Bd.8-10.